

No.3126

『社会的身体の民族誌—ニューギニア高地における人格論と社会性の人類学』の出版

兵庫県立大学 環境人間学部 准教授

深川 宏樹

本助成によって、『社会的身体の民族誌—ニューギニア高地における人格論と社会性の人類学』（風響社、2021年）を出版した。

本書は、文化人類学の中心的な問題である「紛争」と「感情」、ならびに「社会的身体」を主題とし、平成 23～24 年度りそなアジア・オセアニア財団の研究助成から可能となった調査で得られたデータを詳細に分析・考察したものである。なお、本書の一部の元となった論文は、第 13 回日本文化人類学会奨励賞を受賞している。

パプアニューギニアの高地村落の紛争処理と感情の動態の密接な連関を明らかにした本書は、仲裁や村落裁判における個人の怒りの解放や抑圧、ならびに紛争に起因する「重み」（持続的な怒り）の感情が「呪い」へと転化した後に解消に向かう、現地特有の情動の社会秩序を精密に記述・分析した論考である。

本書の出版により、国内では稀少な現代オセアニアの紛争と感情の動態を主題化したモノグラフを世に問うことがはじめて可能となった。また、現代世界において、紛争下／紛争後の社会を生きる人々の生を研究対象とする文化人類学や、社会学、平和学、紛争後社会論などの諸分野、およびオセアニア地域研究の領域においても、貴重な民族誌データとその理論的考察から得られたモデルを公開したことによって、今後、議論の活性化が見込まれる。さらに、本書の出版は、広く紛争研究と感情研究に新たな視点を加え、世界中の人々の実際的な共存の可能な道筋を示す点で、学術的・社会的にも貢献するものであり、その点からも、本書の出版には多大な社会的意義がある。

最後に、本書は、これまで人文社会科学で多大な関心を集められながらも、十分に理論化されてこなかった「人格論」と「社会的身体」をめぐる議論を、ニューギニア高地の民族誌から理論的に展開した、国内外初の学術書であり、その学術的意義は極めて高く、今後のさらなる研究の進展の可能性を示唆するものである。